

# 1917年の労働史—コンカー，スミス，マンデルの研究より

土屋 好古

## 1—はじめに

最近の欧米におけるロシア労働運動史研究の活況のなかで、1917年革命時の労働者に関するいくつかの著作が出版された。1978年、ウィリアム・ローゼンバーグは、革命期ロシアの労働の社会史に関する英語で書かれた本格的モノグラフが一つとしてないと嘆いたが(1)、今日、少なくとも量的にはそうした状況は克服されつつある。

本稿では、これら1917年の労働史を対象としたコンカー、マンデル、スミスの三人の研究をとりあげ(2)、ロシア労働史、革命史にとって重要であり、また従来の研究に対する批判点となっている主要な論点を整理、紹介する。それとともに、今後の課題や展望をさぐりたい。

## 2—労働者の特質について

まず我々はこれらの著作がロシアの労働者の特質をどのようにとらえているのかをみなければならない。なぜなら、労働者の特質のとらえかたが、彼らの運動の特質に関する解釈に影響を与えるからである。

コンカーは「労働者階級」を工場労働者に限定する狭い概念はモスクワの労働者の多様性を正しく説明するのに不適切であるとして、モスクワ・ソヴェトに代表を送った者たちを「モスクワ労働者」と規定した。[Koenker, Diane, *Moscow Workers and the 1917 Revolution*, p.14, 以下, K-14などと略記]。

ここには、手工業職人や運輸、およびその他のサーヴィス業に従事する者も含まれていた。

一方、スミス、マンデルはペトログラートの工場労働者にもっぱら焦点をあてている。

ロシアの労働者の特質の一つとして、従来から農村との結びつきについて議論がなされてきた。この点をいかに評価するのか。また、労働者の態度や志向にそれはいかなる影響を与えていたのか、ロシアの労働者はしばしばいわれるように半農民的な大衆であったのか、こうした点について著者たちは以下のように議論を展開している。

コンカーは、農村との結びつきの存続は、労働者が都市の環境に長くさらされることほどには重要ではないとしている。すなわち、「ロシアの労働者が最近まで農村にいたということを経験することは、労働者文化の形成や、自律的な労働運動をうみだすという点での都市の環境の役割を過小評価することになる。」[K-43]「新しい形の結合や活動を促したり、人的流動性の感覚を養うことによって、都市の環境がモスクワ労働者の全般的相貌を形作り、その同じ環境が社会のなかにある受入れがたい状態の具体例を供給した。」[K-91~92]

こうしたことから、都市に長く住んでいる者は、都市が提供する文化的・教育的可能性を利用する傾向が強く、また読書になじんだ労働者は基本的な政治諸思想にみずから

を親しませることができる。彼等は、革命時における政治的行動において、より批判的な役割をはたす用意ができるであろう [K-46]。

また、より都市化された労働者、熟練層はより行動的であり [K-27]、労働者組織の活動的メンバーを構成することになる [K-75]。

他方、スミスは、工業労働力の中には、プロレタリア化、技術、性別、年齢に従ってそれぞれ自律性をもった重要な社会的分化が存在したとして、労働者の多様性を認めながら、「それにもかかわらず、1917年のペトログラートの労働者階級はだまかに二つに分れていると考えられる。」 [S-36] としている。

第一のグループは、工業に従事しているがなおも農村と強い結びつきを保っている農民からなる。第二のグループは、もっぱら賃労働によって生活し、完全に工場生活にコミットしている労働者からなる [S-14]。

第一のグループには、農民的労働者、女性労働者、新参加者が、第二のグループには年長で、プロレタリア化した熟練男性労働者がそれぞれあたり、前者が労働者の約60%を構成していた [S-36]。そして、これらの二つのグループは、1917年の組織的労働運動と革命政治に対して異なる関係をもった。

女性、農民的、非熟練といった労働者の集団行動の形態は、「カードル」労働者のそれと異なっていて、たゆまぬ、制度化された目標追求のための「資源」を欠いており、非常に容易に、carting out (3)、山猫スト、怠業などの「直接行動」へと向かった。これらの行動形態はしばしば暴力を伴い、常にセクショナルであったが、しかし、考えられているような非合理的なものではなかった(4) [S-198 ~199]。

一方、二月革命後、工場委員会や労働組合を作ったのは「カードル」労働者であった。熟練労働者はすべての労働者組織を支配し、最初に組合に参加した。彼等は最も活動的であり、社会運動を手引きし、意識的に社会的変革を実行する能力において新参労働者よりまさっていた [S-190]。

こうして、スミスは、労働者の多様性、また労働力の中に占める農民的労働者の割合の多さに着目しながらも、労働運動の指導的推進力としての熟練「カードル」労働者の役割の重要性を強調している。

なぜ熟練労働者がこのような役割をはたしうるのでしょうか。一つには労働過程における彼等の役割、影響力の大きさがあげられよう。こうした点に加えて、ペトログラートの労働者を主に技術レベルの観点から類型化したマンデルは次のように説明している。

「熟練金属工業は、多くの変数を含む比較的複雑な計算に基く決定を必要とする、ルーティーンでない仕事を多く含んでいた。この仕事は独立した思考と、抽象と具体の間を容易に行ききできる能力を育んだ。」 [H-12] (5)

その労働の質が彼等の分析的思考や知的資質を養い、そうした中から新しい文化的要求や、個人性や人間的尊厳の感覚、自立への志向をもった労働者があらわれてくる。熟練で都市化した労働者を田舎者の非熟練労働者とへだてる最も重要な特徴の一つは、社会生活における一般化、より抽象的な公的問題において正しい立場に身をおく能力であった [H-30]。

こうして、熟練労働者の中から新しいタイプのミリタント、すなわち「自覚的労働者」が生れた。社会主義政党员であるような労働者は少数であったが、彼等はその十倍も多

い「自覚的労働者」によって支持されていたという[H-15 ~16]。

以上のように、著者たちは、ロシアの労働力における多様性、階層性を指摘した上で、そこにおける熟練労働者の指導性、役割や影響力の大きさに着目している。このような主張は、労働者階級を「暗愚な大衆」ととらえたり、「闘争の最後の勝者がその目的のために利用し、あやつることのできるエレメンタルで、基本的にアナキーな勢力」ととらえたりする、つまり労働者の農民的体質を一面的に論じるような、従来の西側の研究に対する批判である[K-6, H-1~2]。

ここでとりあげた研究においては、上でみたような特質をもった労働者の運動は、基本的に合理的なものであるととらえかえされ、また、多様性、階層性への着目からは、単線的ではない労働運動の展開への照射がなされることになる。そこで、次に1917年二月から十月革命にいたる労働運動の全般的展開、急進化の過程についての議論に目を向けよう。

### 3-二月から十月へ

二月革命は、労働者に様々な権利を主張する契機を提供し[H-85, S-54]、彼等は8時間労働日、賃上げ、工場内の民主化などを獲得していった。

しかし、政治的には革命直後の労働者の態度は穏健で、革命の結果生じた二重権力状態を支持していた。

労働者は、「新しく作られた(有産社会との)同盟に関して強い留保と疑念を保持し、政府に対するソヴェトの『コントロール』という形で保証をもとめた」[H-82]ではあるが、革命の勝利が国民的統一への強い願望をひきおこし、「二重権力を実行可能な処置として受入れないペトログラートの労働者はほとんどいなかった」[H-68~69]のである。

このことは、戦争に対する労働者の間での強固な「革命的防衛主義」的態度にもあらわれていた[H-71]。

労働者は孤立をおそれ、革命的統一を望んでいた。三月後半に、非社会主義系新聞が、労働者は戦争努力を犠牲にして、狭い自己中心的利益を追求していると非難しはじめた時、兵士との対立をおそれて、最も急進的なくつかを含めて、多くの工場が時間外労働を行う用意があることを表明した[H-92]。

工場委員会の運動の中にもこうした傾向が認められた。工場委員会が国有企業の運営をひきうけた重要な理由は、戦争努力のための生産が停止されないようにするためであったし[S-60~61]、生産性の低下に対して出された誠実に働くようにという無数の勧告の多くが、1917年の春には防衛主義的感情にいろどられていた[S-90]。

状況はモスクワでも同様であった。「三月の諸事件のバースベクティヴからは、より急進的な革命ははるかに遠いもののように見えた」[K-106]。また、モスクワ・ソヴェトが戦争への態度として採用したのは、ペトログラート・ソヴェトの決議、つまり革命的防衛主義のドクトリンであった[K-109 ~111]。

労働者のこうした態度をほりくずし、彼等を急進化させていったのは、外交、内政、経済における様々な連鎖であった。

四月危機は、ペトログラートの革命前の階級分極を社会的・心理的レベルにおいて復活させるのに多大な貢献をなした[H-117]。

四月の後には、三月の幸福感は、政治的袋小路とせまりつつある経済的破滅感の増大の中で忘れられ、労働者階級とブルジョアジーの二月の和親は、社会的、経済的、そしてつまるところ政治的領域において増大する苦々しい分極化に道をゆずった [H-122]。

労働者の「革命的防衛主義」は、政府の積極的平和希求が前提となっていたが、軍事攻撃の準備の中で急速に解体しつつあった [H-135]。

国の経済調整に対する反対、生産への関心の喪失、生産縮小と閉鎖への傾向は、資本家の反革命気運の具体的、直接的なあらわれであると労働者の目にはうつった。彼等はこれを単なる経済的戦略ではなく、革命の前衛であるプロレタリアートを弱体化させ、解体させる目的をもった政治的なものとみなした [H-137]。こうして、有産社会とその政府は反革命的であるという結論が労働者階級の広い範囲に受け入れられ、それに基づいてソヴェト権力に対する支持が増大した [H-129]。

七月、八月には、七月事件、コルニーロフの反乱などの中で、有産階級の代表とソヴェト代表の連合への支持、それを主唱した穏健社会主義者への支持が労働者階級の間でほぼ完全に消滅した [H-218]。

スミスも次のように述べている。「経済危機の深化がペトログラートの労働者の政治的急進化に背景を供給していた。二月革命後労働者が獲得した成果をケレンスキー政府は守ることができないということ、守ろうとしない（とうけとられた）ことが、その政府を支持していた穏健社会主義者への幻滅の増大をみちびいた」 [S-25] 「経済的崩壊は主に故意の、雇主による『サボタージュ』の結果だという信念」が労働者の間に広く認められ、「サボタージュと闘うことをポリシェヴィキがいとわなかったことが、1917年の夏と秋の急速な人気増大の秘密であった。」 [S-167]

モスクワにおいても、こうした過程は類似していた。ここでも、「革命的抗議に関与することが増大した基本的要因は、悪化の一途をたどる経済状況であった。」 [K-129]

そして、「政府のうちつづく失敗、経済政策の失敗、ペトログラート・ソヴェトの効果的圧力行使不能によって、労働者は敵意ある経済行動を反革命の政策と関連づけはじめた。」 [K-268]

食糧不足、生活費の上昇、様々な理由による工場閉鎖などといった経済的危機の中で、「徐々に労働者は、個々の経営者や階級としての資本家が、生産や生活水準の低下を助長しているとみなすようになった。階級のレトリックが、春と夏の経済的事象に論理的説明を提供した。これは旧秩序に対する革命ではなく、階級戦争であった。」 [K-132]

こうした中で、労働者たちは、少なくとも憲法制定会議までは、諸ソヴェトの政府のみがこれらの問題を誠実に扱うことができ、完全な破滅から革命の勝利を守ることができると感じるようになった [K-141 ~142]。すなわち、「ソヴェト権力という考えは多くの問題、つまり熟練金属工によって最も鋭く感知されていた階級闘争、繊維工によってさえ感じられていた経済危機、そして広範な労働者によって共有されていた組織上の正統性の問題を解決するようにみえた」 [K-267]のである。

以上のような過程をたどって十月革命は準備されたと著者たちは主張している。しかし、こうした急進化の過程は、決して一様なものではなかった。マンデルはヴィボルク地区を中心とする私企業金属労働者、非熟練労働者層、国有企業などの労働者の急進化の時間的ズレや直接的契機の違いを描いている。またコンカーも、機械組立て工のような最も政治的に行動的な労働者は、団結の必要性と、他の労働者が必ずしも自覚性にお

いて彼等の程度に達していないという事実を理解して、みずからの極端な考えを抑制していたとしている [K-291]。

さらに重要な点として、著者たちは、こうした労働者の急進化をきわめて合理的なものとしていること、いわゆるポリシェヴィキ化もそうした合理的な対応の一つであったとしていることである。

「急進化は、アノミーや、正統的権威の崩壊に狂ったアナーキーな本能、千年至福主義的なムード、煽動的なあやつりというような要因にたよらずとも十分に説明しうる。……二重権力への初期の支持が、二月の状況と様々な行動のコースに含まれる危険の評価に基づいていたように、ソヴェト権力への移行もまたこの評価の修正を要求したのちの経験に基づいていた。」 [H-178]

「労働者階級のポリシェヴィキへの支持の増大は、労働者の非合理的な衝動を党がうまく利用した結果ではなく、むしろ、労働者の志向と党のプログラムおよび戦略の間の対応の増大のあらわれであった。1917年のペトログラート労働者の累進的急進化は、ユーロピアへのエレメンタルな衝動でも、千年至福主義的な運動でもなく、自覚性の憤重で苦しい発達であった。これは、それが手段や目的を現実的によく考えるということを含んでいたという基本的な意味において、本質的に合理的な過程であった。」 [H-3]

また、「(モスクワの)労働者の態度の細部を考える時、革命をなした『灰色の大衆』に帰せられることの多い盲目的な革命的熱情や、間違いじみた最大限主義にではなく、表明された意見の思慮深さと合理性におどろかされる。ソヴェト権力の要求はふつう労働者階級のポリシェヴィキ化と同一視される。しかし、この要求を出した理由がいかに複雑だったかを記さねばならない。」 [K-267~268]

「大多数の労働者が、自分たちの利益とポリシェヴィキのプログラムを同一視するようになったプロセスは、変化する政治的・経済的連鎖に応じた合理的・論理的選択の産物であった。」 [K-362]「ロシアの労働者を、すべて非合理的で、教育がなく、政治過程に自律的に参加できない者とするイメージは拒否しなければならない。諸都市での革命は、『声高に繰返しているスローガンの本当の意味を理解できない』暗愚な半農民大衆によって遂行されたという神話を拒否しなければならない。」 [K-360]このようにコンカーは主張している。

以上のような把握、理解は、第2章でみた労働者の特質に対する評価と密接に結びついたものであり、ここに著者たちの従来の研究に対する重要な批判の一つがあるといえよう。

#### 4 - 労働者統制

次に労働者統制についてみてみたい。二月革命の直後から労働者は古い「絶対主義的秩序」に代って、新しい「立憲的秩序」をうちたてようとした。労働者は工場の民主化を求め、工場内部の主要決定（雇用、解雇、内部秩序規則）に参加する権利を求めた。すなわち、「今や革命が労働者を市民に、つまり公的生活において彼等を管理側と平等にしたのだから、彼等は工場でもそのようにあつかわれることを望んだ。……その要求は、管理当局の生産の技術的・経済的側面を管理する権利を否定してはいなかったが、しかし、少なくとも労働が行われる条件を規定する点で平等の発言力を労働者に与えるものであった。」 [H-96]

また、国有企業では、革命直後の管理者不在の中で工場委員会が一時的に企業の運営をひきうけた。

こうした状況から、労働者統制と呼ばれる運動は出発した。この運動は、ペトログラートの労働者の間で「自然発生的」に[S-142]「下から」[H-152]生れたものであった。

スミスは、ペトログラートの労働者統制を、それぞれ、革命過程の異なる経済的・政治的局面と結びつけた四つの局面を通して発展したと整理している。

すなわち、三月から四月の第一の時期には、労働者統制は主に国有企業に限られていた。工場委員会は、いたるところで工場内諸関係を民主化するより広い意欲の一部として、雇用と解雇のコントロールを確立しようとした。

五月から六月の第二の局面では、ほとんどの工場委員会は、原料や燃料の供給を監視しはじめ、自分たちの工場が効果的に運営されているかをチェックしはじめた。ポリシェヴィキがその運動の中で政治的ヘゲモニーを達成したのはこの時期であった。

七月から八月の第三の局面では、経済危機が噴出し、階級闘争が深化した。雇主は攻勢に出て、工場委員会の力を抑えようとした。委員会のいくつかは、注文や財政を含む生産の全側面を監視するために「統制コミッション」を設立した。

九月から十月の第四の時期には、これらの発展が強化された。きびしい経済的・政治的危機があり、階級的矛盾が激化した。雇主の中には自分の工場を閉鎖しようとする者があり、工場委員会がその企業の運営をひきうけた例があった。工場委員会は、ソヴェトへの権力移行の闘争に積極的に関わるようになり、経済的困難に対する対応としての労働者統制は、工場生活の民主化という初期の衝動とかみあいはじめ、その結果、労働者の自主経営を模索する運動を生み出した[S-149]。

こうして、二月から十月の8ヶ月の間に、労働者統制は、対抗的、防衛的、観察的なものから、積極的、攻撃的、干渉主義的なものへと、生産を「監督」することから、積極的に生産に干渉し、資本の権限を大幅に制限しようとする試みへと発展したのである[S-149]。

マンデルもスミスほどに整理されてはいないが、こうした展開のありようを跡づけている。二月、三月の段階では、労働者の要求のどれも、経営側の生産の技術的・経済的側面に対する管理権を否定するものではなかった[H-102]。

労働者は、自身のプログラムであり、独立した革命概念である「立憲的」体制を、有産社会や工場の所有者の代表が守る限りにおいて、彼等の手に執行権をすすんでゆだねたのであった[H-109]。

四月から七月の時期にも、運動の主要な推力は監督と監視という意味での統制であり、実際に工場を運営しようという主張は押出されなかった[H-155]。しかし、それ以降、エスカレートする労使間の争いの中で、工場委員会は、そのもともとの統制機能から、ますます生産管理への直接的介入にひきこまれていったのである[H-273]。

労働者統制は、労働者の側での企業主との協働可能の信念を含んでいたが、資本家の側がこの協働を拒否した。労働者にとっては、経営側の不活発さや、意識的サボタージュによって作られた空間をうめるために動くほかに選択の余地はなかった[H-274~275]。

重要なことは、労働者統制の運動が、もともと穏健な実際の動機から出発しているということ、またそれは「下から」「自然発生的」に生起し、イデオロギー的側面は稀薄であったという点である。

すなわち、「生産の労働者統制はなによりもまず、工場委員会による工業の混乱の潮流をくい止めようとする試みであった。その短い生涯を通して、労働者統制の運動は、増大する経済的混乱の中で生産を維持しようとする様々な試みをなした。その運動の背景の衝動は、イデオロギー的なものからは遠く、実際的なものであった。」[S-146]

モスクワについてのコンカーの指摘も同様である。「工場レベルでの労働者統制は、多くは労働者の経済的生存を守るためのその場その場の自然発生的な方法であった。労働者は、商品や利益の正当な分配のために工場を支配することには関心がなかったようにみえる。そうではなくて、彼等は生計をかせげるように、工場を操業させておきたいと望んでいるだけであった。」[K-151~152]

こうして、以下のような主張がなされる。すなわち、「労働者統制は、その発生期にもより発展した段階においても、それ自体抽象的なもの、何か本質的に望ましいものとしての『工業の民主主義』を求める運動ではなかった。この意味で、その運動はアナキストによって支持されてはいたけれども、アナキスト的思想によって動機づけられていたのではなかった。労働者統制とは、労働者の利益と革命が守られるように経営側を監視することを意味していた。もし中央政体（ソヴェトか労働者国家）がそれをよりよくできるなら反対はなかった。」[H-103]（6）

「経営の伝統的大権への侵入は、工場委員会や一般労働者の側における権力への欲求の表現ではなかった。現実に変化してはいたが、工場委員会の背後にあった基本的動機は同じもの、つまり工場を稼働させておくということであったのである。」[H-274]

労働者が企業の運営をひきうけたごくわずかな例でも、工場委員会は政府やソヴェトと連絡をとり、国が工場を接収するように要求した[S-179~180, H-154 ~155]。こうして、労働者統制をサンディカリスト的とする見解は否定されている。

最後に、ポリシェヴィキと労働者統制の関係についてスミスの主張を引いておこう。

「生産の労働者統制に対する西側の解釈の主流は、ポリシェヴィキと工場委員会の間の二分法を仮定している。党は集権化された国家統制経済とみなされ、一方委員会は、労働者自身によって運営される分権的経済の主役として描かれる。ポリシェヴィキは労働者統制に対して日和見主義的政策を追求し、十月まではその目的に同意したからではなく、工業に混乱をひきおこし、資本主義階級を弱体化させるためにそれを支持したのだと論じられている。しかし、ひとたび彼等が権力を握れば、ポリシェヴィキは委員会をつぶし、労働者統制を根絶し、経済をヒエラルキーのラインで再編した。……このような解釈は、多くの理由で誤っているようにみえる。第一に、工場委員会の志向が『サンディカリスト的』であったというのは適切ではない。第二に、十月までポリシェヴィキは工場委員会の労働者統制と、経済の国家的組織化の間の非両立性に気づいていなかった。第三に、ポリシェヴィキ党に工場委員会を対置するのは正しくない。委員会の指導的幹部のほとんどは、ポリシェヴィキのメンバーでもあった。最後に、そのような対置は、実際には存在しなかった委員会とポリシェヴィキ双方の内部での考え方の統一があったかのようにほのめかすことになる。」[S-149~150]

「ポリシェヴィキが自分たちの目的のために工場委員会をずるがしこくあやつったと結論するのは誤りであろう。社会で大きな力であったのは、組織された労働者階級であって、ポリシェヴィキ党ではなかった。しかし、1918年初めの戦時の資本主義体制の崩壊は、労働者階級の強さをこわし、その時点ではじめてポリシェヴィキが権力の独占を

達成する場に立ったのである。」[S-259]

## 5-労働者の意識性(7)

最後に、労働者の意識性の問題についてみてみたい。

ウィリアム・ローゼンバーグは前掲の論文の中で次のような指摘をした。すなわち、第一に、工場委員会はあらゆるタイプの職場におどろくべき数で形成されたが、その数は職業的セクタリアニズム、つまりより広い集団の一員としてではなく、当該の職場、工場、産業の一員として自分をみる強い傾向を反映していたということ、第二に、ツェーホフシチナ（職場主義、職業主義）は、労働組合運動の中にはっきりとあらわれていたということ、つまり、1917年にベトログラートでは110以上の組合が、モスクワでは60以上の組合が組織されていて、たとえより広い労働者組織が形成されても、直接的な工場の問題を支配していたのはなおもローカルな職場組織であったということ、以上である(8)。

以上の指摘は、労働者のセクタリアニズム、狭い帰属意識に関する重要な問題提起である。従来から、ロシアの労働者が、特定の工場への強い帰属意識をもっていて、みずからをブチーロフツィ（ブチーロフ工場人）とかオブーホフツィと称した習慣はよく知られている。このような意識と、階級意識、あるいは運動とはいかなる関係をもったのであろうか。

コンカーはモスクワで形成された最初の組合は、金属工や繊維工といった大産業のものではなく、職人的職業、あるいは工場数の少ない産業を基盤としたものであったという[K-147~148]。

そして、経験ある活動家が、彼等の組織を規定する方向へ第一歩をふみだすのに長くはかからなかったがもっと下のレベル、つまり大衆の参加のレベルでは、組合はもっとゆっくり発展したとして、次のように述べている。「労働者にとって工場委員会を形成することはやさしかった。というのは、これらの委員会は、既存の実体、つまり、工場を代表したからである。しかし、労働者が、自分たちが見知っていない同産業のメンバーと共通の利害をもっているということを認識することは、経験と教育を必要とするような抽象であった。」[K-149]

コンカーの著書の巻末の付録によると、1917年のモスクワの労働組合にはかなり多くの職能組合があったことがわかる[K-374~375]。しかし、これらの組合にどれだけの数の労働者が組織されていたのかは残念ながら不明である。

また、彼女は、モスクワの革命史を通じて強い地域主義が存在したことも指摘している[K-146]。

スミスは、部分と全体の問題についてより明確である。彼は、部分的団結であり、部分的利害を階級利害の上におくので厳密には階級意識ではない意識を、職場オリエンテーション、工場パトリオティズム、クラフト意識の三つにわけ(9)。

1905年以降、労働組合への限られてはいるが合法的機会、特定の工場への忠誠を減じた。しかし、1917年2月、労働者が最も自然に組織の基礎にえらんだのは個々の工場であった(10)。こうして、革命直後には工場委員会が設立された。

大工場では、工場委員会は職場委員会によって支えられていたが、職場委員会設立は職場セクタリアニズムの反映ではなく、1917年に特徴的であった草の根民主主義と自律



の行動への傾倒をあらわしていた。また、一般労働者からの職場オートノミーへの圧力に対する工場委員会の譲歩でもなかった。職場委員会設立の動機は、実際的なものであった。つまり、膨大な量の仕事を扱いきれない工場委員会が、個々の職場に関する仕事を職場委員会に請負させたのである。フェデラリズムを、ましてやアナキーを促す意図はなかった。職場委員会は、工場委員会に従属するということが明確にうたがわれていたのである [S-82]

工場委員会は、労働組合よりも大きい分権性と地域的自律性によって特徴づけられていたが、集権化への圧力が最初から存在しており、しかも、集権化は下からおこった。この意味で、西側の歴史家による工場委員会運動の地域的・分権的側面の強調には限定が必要であるとスミスは主張している [S-82~83]

工場委員会は、労働者の中での革命的政治意識促進の点で、ソヴェトや労働組合より重要な役割をはたした。このことから、工場を基礎とした組織も、ある職場での労働者どうしの心理的一体感も、より広い階級組織や自覚を阻害するものではなかったという主張もみちびきだされている(11)。

また、労働組合については次のように議論が展開されている。

ペトログラートでも、モスクワと同様に最初に組織されたのは、小さい職場の産業の労働組合であった [S-104]。二月革命後、労働者はまずローカルな職能組合を形成した。例えば、金属およびその関連の職業で20余りのそうした組合があらわれた。しかし、これらのほとんどは長続きせず、やがて金属組合に吸収されていった [S-106]職能組合主義は、1917年には決して衰退した勢力ではなかったが、その強さは他の国におけるそれとくらべれば大きくはなかった。1917年十月までに、ペトログラートは世界で最も高度な組合化達成をなしとげており、市の組合員の少なくとも90%は産業組合のメンバーであった。同時に、これらの組合は団体賃金交渉という分野で他のすべての国をしのいでいた。この達成に対してこそ、職能組合主義とクラフト意識は評価されねばならない。スミスはこのように述べている [S-109](12)。

上でみた議論から、モスクワとペトログラートでは若干、状況が異なっているように見える。それは、両者の産業構造や、工業的伝統などによるところも大きいであろう。しかし、モスクワでも労働運動の指導的立場の者は、他の労働者との団結に努力し、それにある程度成功していたように見える [K-291]。スミスもコンカーも、狭い忠誠や帰属意識と、より広い、階級的連帯や意識とは必ずしも背反するものではないという立場にたっているといえよう。

#### 4 - おわりに

従来、革命史の中で、その一側面としてとりあつかわれ、「神話的」説をも生みだしていた労働史を、自律的な、独自の論理をもった労働者の運動としてとらえかえそうとした著者たちの視点には、まず共感できるものがある。こうした視点は、近年のロシア労働史研究全般の流れの中にある。今後も、こうした「下から」の視角をもった研究がすすめられる必要がある。

しかし、いくつかの問題点が残されているように思われる。まず第一に、ポリシェヴィキ化の解釈についてである。著者たちは、二月から十月にいたる状況の中で、労働者の選択肢がポリシェヴィキに限られていく過程としてポリシェヴィキ化を描いている。

たしかに、こうした側面は重要であろう。しかし、ポリシェヴィキ支持は必ずしも1917年にも限られた現象ではなかった。単に状況による選択という解釈のみでポリシェヴィキ支持をとらえきれぬのは疑問である。

この点については、1917年以前の労働史の中での労働者と社会主義諸政党の関係が一層探求されねばなるまい。

第二に、著者たちは、主に従来西側の研究に対する批判点を前面におしだしており、ある意味で、ソ連史学の労働史に近づいている。しかし、同時に、労働運動の単線的発展という図式を排することによって、ソ連史学への批判点も有している。

ところが、この点についての議論が必ずしも十分ではない。例えば、マンデルは労働者の急進化について、労働者のグループの間に時間的なズレがあったことを示している。これは確かにより複雑なモデルを提供してはいるが、しかし、その議論はいわば「複数の単線的発展」とでもいうべき陥せいにおちいつているようにみえる。コンカーは、この点マンデルより慎重であるが、労働者の諸階層間の関係、労働者内部の指導—被指導関係などについて研究が必要である(13)。

こうした点は、最後にみた労働者の意識性の問題とも深くかかわるところである。

近年の労働史研究はいわゆる社会史的側面を重視することによって、労働者の具体像を明らかにすることにかなり成功してきた。しかし、まだ重要な問題点が未解明のまま多く残されている。こうした点を探求していくことが我々の課題であろう。そして、こうした作業と並行して、いま一度、労働史を近代ロシア社会史の中で位置づけることがなされねばならない。それがあってはじめて労働史も近代ロシア社会史もゆたかなものとするができるであろう。

#### 註

(1) Rosenberg, William. Workers and Workers' Control in the Russian Revolution History Workshop, 5, Spring 1978, pp. 89—90

(2) Koenker, Diane Moscow Workers and the 1917 Revolution. (Princeton 1981)  
Smith, S.A., Red Petrograd; Revolution in the Factory (Cambridge 1983)

Mandel, David, The Petrograd Workers and the Old Regime: From the February Revolution to the July Days, 1917 (Macmillan 1983)

Idem, The Petrograd Workers and the Soviet Seizure of Power: From the July Days 1917 to July 1918. (Macmillan 1984)

これらの著書についての典拠は本文中で著者の頭文字と著書のページ数でしめすこととする。スミス、マンデルの研究は1917年10月以降も扱っているが、本稿においては10月までについての問題をとりあげることにする。

(3) 手押し車に、標的となった人物をのせて工場の門外へ放り出す行為。

(4) 例えば、carting out について、それはあるレベルのコミュニケーションと協調、そして、適切な行動であるという概念を必要としていたとスミスは言う[S-199]。

(5) マンデルの著作は二冊であるが、ページ数が通しでつけられているので、いちいちどちらの著書であるかは示さない。211 ページ以降が、後半、つまり1984年出版の著作にあたる。

(6) このような点については、スミスもほぼ同じ見解である。Smith , pp.142-145 , p.158 を参照のこと。

(7) 本章については、スミスの以下の論文も参照のこと。Smith,S. Craft Consciousness, Class Consciousness ; Petrograd 1917, History Workshop, 11, 1981 Spring,

(8) Rosenberg,William . op.cit. pp. 93-94

(9) Smith,S. Craft Consciousness …… p.34

(10)ibid. p.36

(11)ibid. p.36

(12)ibid. p.51-52 も参照。

(13)この点については、我が国の辻義昌が、熟練労働者と非熟練労働者との緊張関係という重要な視点を出している。辻義昌『ロシア革命と労使関係の展開』（東京1981）

[東京大学大学院・人文科学研究科]